

総合人間科学 倫 理 学

1 構 成 員

| | 平成 24 年 3 月 31 日現在 | |
|--------------------------|--------------------|-------|
| 教授 | 1 人 | |
| 准教授 | 0 人 | |
| 講師（うち病院籍） | 0 人 | (0 人) |
| 助教（うち病院籍） | 0 人 | (0 人) |
| 助手（うち病院籍） | 0 人 | (0 人) |
| 特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む） | 0 人 | |
| 医員 | 0 人 | |
| 研修医 | 0 人 | |
| 特任研究員 | 0 人 | |
| 大学院学生（うち他講座から） | 2 人 | (0 人) |
| 研究生 | 2 人 | |
| 外国人客員研究員 | 0 人 | |
| 技術職員（教務職員を含む） | 0 人 | |
| その他（技術補佐員等） | 0 人 | |
| 合計 | 5 人 | |

2 教員の異動状況

森下直貴（教授）（2002 年 11 月～現職）

3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

| | 平成 23 年度 | |
|---------------------|----------|-------|
| (1) 原著論文数（うち邦文のもの） | 3 編 | (3 編) |
| そのインパクトファクターの合計 | 0.00 | |
| (2) 論文形式のプロシーディングズ数 | 0 編 | |
| (3) 総説数（うち邦文のもの） | 0 編 | (0 編) |
| そのインパクトファクターの合計 | 0.00 | |
| (4) 著書数（うち邦文のもの） | 2 編 | (2 編) |
| (5) 症例報告数（うち邦文のもの） | 0 編 | (0 編) |
| そのインパクトファクターの合計 | 0.00 | |
| (6) その他（レター等） | 0 編 | |
| そのインパクトファクターの合計 | 0.00 | |

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
1. 森下直貴、「子育て」に今日的意義はあるかー ―身近な他者たちの協同作業>という視点、都市問題、第102巻第12号、44-52、2011.12
 2. 西川哲・森下直貴、実験動物慰霊祭参列者の意識調査：アンケートの結果から実験動物技術、第46巻2号、67-72、2011.12
 3. 森下直貴、主題別討議報告「病と健康」（実施責任者）、倫理学年報61、58-70、2012.3
- インパクトファクターの小計 [0.00]

- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- 1.
- インパクトファクターの小計 [0.00]

- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
- 1.
- インパクトファクターの小計 [0.00]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
- 1.
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- 1.
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの
- 1.

(3) 総 説

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
- 1.
- インパクトファクターの小計 [0.00]
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- 1.
- インパクトファクターの小計 [0.00]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森下直貴、緒言および第1章：生命倫理とは何か—ゆるやかなコンテキストの形成、
今井道夫・森下直貴編、シリーズ生命倫理学第1巻『生命倫理学の基本構図』丸善出版、2012.1
2. 森下直貴、第6章：健康と病気—滞ることなく流れる循環、
香川知晶・樫則章編、シリーズ生命倫理学第2巻『生命倫理の基本概念』丸善出版、2012.1

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1.

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

(6) その他（レター等）

1.

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

| | |
|--|--------|
| | 平成23年度 |
|--|--------|

| | |
|--------------|-----|
| 特許取得数（出願中含む） | 0 件 |
|--------------|-----|

1.

5 医学研究費取得状況

| | 平成 23 年度 | |
|--------------------|----------|----------|
| (1) 文部科学省科学研究費 | 1 件 | (420 万円) |
| (2) 厚生労働科学研究費 | 0 件 | (0 万円) |
| (3) 他政府機関による研究助成 | 0 件 | (0 万円) |
| (4) 財団助成金 | 0 件 | (0 万円) |
| (5) 受託研究または共同研究 | 0 件 | (0 万円) |
| (6) 奨学寄附金その他（民間より） | 0 件 | (0 万円) |

(1) 文部科学省科学研究費

基盤研究（B） 課題番号22320004

先端科学技術の「倫理」の総合的枠組みの構築と現場・制度への展開

平成22～25年度

(2) 厚生労働科学研究費

(3) 他政府機関による研究助成

(4) 財団助成金

(5) 受託研究または共同研究

6 新学術研究などの大型プロジェクトの代表, 総括

1.

7 学会活動

| | 国際学会 | 国内学会 |
|-----------------|------|------|
| (1) 特別講演・招待講演回数 | 0 件 | 0 件 |
| (2) シンポジウム発表数 | 0 件 | 1 件 |
| (3) 学会座長回数 | 0 件 | 1 件 |
| (4) 学会開催回数 | 0 件 | 0 件 |
| (5) 学会役員等回数 | 0 件 | 2 件 |
| (6) 一般演題発表数 | 0 件 | |

(1) 国際学会等開催・参加

1) 国際学会・会議等の開催

2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演

3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表

4) 国際学会・会議等での座長

5) 一般発表

口頭発表

ポスター発表

(2) 国内学会の開催・参加

1) 主催した学会名

2) 学会における特別講演・招待講演

3) シンポジウム発表

日本倫理学会、2011.10.1

4) 座長をした学会名

日本倫理学会、2011.10.1

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 日本医学哲学・倫理学会：評議員

2. 日本生命倫理学会：総務委員会委員

8 学術雑誌の編集への貢献

| | 国内 | 外国 |
|-------------------|----|----|
| 学術雑誌編集数（レフリー数は除く） | 0件 | 0件 |

(1) 国内の英文雑誌の編集

(2) 外国の学術雑誌の編集

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

9 共同研究の実施状況

| | |
|--|--------|
| | 平成23年度 |
|--|--------|

| | |
|------------|-----|
| (1) 国際共同研究 | 0 件 |
| (2) 国内共同研究 | 0 件 |
| (3) 学内共同研究 | 0 件 |

(1) 国際共同研究

(2) 国内共同研究

(3) 学内共同研究

10 産学共同研究

| | |
|--------|----------|
| | 平成 23 年度 |
| 産学共同研究 | 0 件 |

1.

11 受 賞

(1) 国際的な授賞

(2) 外国からの授与

(3) 国内での授賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

私の研究は倫理学を中心にして四つの領域に広がる。四つとはすなわち、形而上学、日本思想史、物質・生命・心・意識・文化の存在論、公共哲学である。

まず、形而上学に関しては、井筒俊彦の思想の研究を皮切りに、フッサール後期の現象学や、カントならびにヘーゲルの哲学を研究する中で、ものごとの形成の論理として独自に「後続的作動循環」を取り出すことができた。

次の日本思想史では、井上哲次郎を中心とする明治期の「日本哲学」と基軸にして、一方ではそれ以降の西田幾多郎や三木清の哲学、他方ではそれ以前の空海から天台本覚思想をへて神道や日本儒教に通じる流れを研究することを通じて、日本思想の形而上学的次元を明らかにすることができた。これは次年度以降の科研費研究に引き継がれる。

三つ目の物質・生命・心・意識・文化の存在論では、後続的作動循環の視点から、ロボットの心と人間の心との構造的差違を明らかにすべく研究を継続中である。先端科学の倫理的枠組みを確立する科研費研究の理論的案基礎づけを狙っている。

最後に、倫理学および公共哲学では、ポストモダン化、グローバル化、デジタル化の中で、現在が倫理的枠組みの転換期にあり、そこから自分・家族・組織・国民の各水準にまたがって「セルフ・ガバナンス」が求められているという観点から研究を進めている。そのうち家族については「身近な他者による協同作業」という新たな枠組みを提出したが、これは医療倫理にも応用できるものである。

13 この期間中の特筆すべき業績, 新技術の開発

1.

14 研究の独創性, 国際性, 継続性, 応用性

1.

15 新聞, 雑誌等による報道

1.